

## 関西支部勉強会『車椅子使用者の円滑な航空機利用について』 参加報告

林 威智郎

川村義肢株式会社 住環境整備推進課

### 1. はじめに

年始の航空機事故は、まだ記憶に新しいのではないだろうか。当該旅客機にはお二人の車椅子使用者が搭乗されていたとのことで、その方々含め旅客機の乗員乗客全員が脱出できたことは不幸中の幸いである。

さて、この様に車椅子使用者の航空機利用が増えてきた昨今ではあるが、円滑な利用ができているのだろうか。今回の勉強会ではこれまでに行ってきた航空関係者向け車椅子取り扱いセミナーのまとめを話題提供とし、当事者の体験と、アメリカでの国内規格及び制定の動きについての発表を通して深掘りする内容であった。とても有意義であり、車椅子利用者の自律・社会参加に不可欠な内容だと感じられるイベントだったため、ここで参加報告する。

### 2. イベント内容

#### 2.1 これまでの車椅子利用者の航空機利用イベント

日本リハビリテーション工学協会関西支部副支部長 剣持氏（川村義肢株式会社）より、これまで開催されたセミナー及び参加者アンケート結果報告が行われた。

航空機利用の際に考慮すべきこととして、当事者としての立場、航空会社としての立場と言う単純なものではなく、接客の立場・貨物搬送としての立場など、細分化した立場を背景として考えるべきであり、それぞれ多くの課題は複雑に絡み合っている。円滑な航空機利用を考えるのならば、それらそれぞれの課題を緩やかに解きほぐしていく必要がある。そのため、

これまで各課題に対し当事者を含めた関係者と一緒に情報共有のための勉強会を行ってきたとのこと。

その中で参加者からのアンケートから見てきたこととしては、電動車椅子のバッテリーの確認・目視及び取扱いの方法が不明瞭だということ。今後においては電動車椅子のバッテリーを含めた取扱いの情報入手と共有が定期的に必要なとのことだった。



図1 会場の様子

#### 2.2 当事者の立場から

全国頸髄損傷者連絡会事務局長 宮野氏より電動車椅子利用当事者として、これまでの経験から発表いただいた。

宮野氏は兵庫県三田市から現在沖縄県に移住され、海外旅行をはじめ、昨年は30回もの航空機利用をされているとのこと。電動車椅子の使用や航空機利用は社会参加のための手段であり、円滑に移動できることが重要なポイントである。円滑化のため宮野氏が航空会社に伝達している情報の一部を以下に記す。

- ・身体状況（四肢麻痺・歩行困難）
- ・移乗介助スタッフ必要人数  
（空港内移動用車椅子／機内座席）
- ・移乗の際に使用する移乗用具
- ・利用している電動車椅子情報  
（長さ・高さ・幅・重量・バッテリーのタイプ・

川村義肢株式会社 住環境整備推進課  
〒574-0064 大阪府大東市御領 1-12-1

目視可否)

・電動車椅子の取扱いや持ち上げ可能箇所

などを伝えるとともに、電動車椅子はチェックインカウンターで乗り換え預けることも伝え、チェックインには1～2時間の余裕をみるとのこと。

これら情報を提供したとしても、航空会社の用意している資料にはあいまいな部分やフロー通りにはいかないことがあり、当てはまらないことが多々あるのが現状である。しかし、搭乗できないほどの課題は感じられず、適切なサービスは受けられていると感じている。初めて航空機利用される方々も含め、多くの当事者が円滑に利用するためには、情報の共有（知る機会を増やすこと）が必要であり、障害当事者が航空法など国内法を知るための勉強会やセミナーへの参画が必要とのこと。また、当事者としても全てに対し理由の説明が必要であるとも付け加えられていた。双方の情報が適切に共有できれば問題は起こらず、円滑化が図られると感じた。



図2 発表の様子

しているとのこと。

これら現在進めているアメリカ規格であるが、後々国際規格になり得るとのことで、このアメリカの規格を少しひも解いてくれた。

例えば民間航空機への搭載を考慮した車椅子としてルール決めしたものを一部記載する。

- ・折畳可能車椅子は折畳状態を維持できるようにする。
- ・車椅子は固縛可能とし、固縛箇所をラベリングする。
- ・車椅子を持ち上げる際の把持箇所を明示する。
- ・フットサポートなどを機内持ち込みのため、取外し式にする。
- ・車体本体は航空機に格納できる高さにする。
- ・バッテリーは工具なしで目視できる様にする。

これらの様な車椅子規格、あるいは空港施設・航空機自体や対応に関する用語など全てにおいて各分野が協力し意識の統一（規格化）を行うことが当事者の社会参加に繋がるのだと感じられる内容だった。



図3 発表の様子

## 2.3 アメリカでの国内規格と制定の動きについて

規格開発に携わっている立場から、埼玉県産業技術総合センター 半田氏よりとても分かりやすく規格化の大切さについてお話いただいた。

規格についての定義は色々あるが、そもそも社会を安全・安心・便利にするための自主的なルールであり、強制ではなく罰則もない。ただ、間違いなく社会が便利で安全になり、より良い社会になるものであるとのこと。

その規格をアメリカの航空機利用に取り入れようと動き出したのが、ある車椅子使用者。そのアプローチには車椅子に対する規格、飛行機に対する規格、空港の建物に対する規格など対象ごとに規格を整備する必要がある。幅の広い「空の旅に関する規格」を考えるため、手始めに車椅子に対する規格に着手

## 3. まとめ

参加者から活発な質問や意見があったことから、関心度の高さが見受けられた。また指定討論でもあったが、各団体が対応などソフト面においても当事者を中心に活動を進めているとのことで、国際的イベントの活発化を切っ掛けとして、あらゆる整備が加速的に進んできていると感じた。各団体・各イベントにて得られた意見をまとめ、共有・発信し、規格化していくことで誰しもが円滑な社会参加が行える時代がすぐそこまで来ていると実感できた。一方で、発表者であり障害当事者の宮野氏から「支援では当事者本人が納得できることが一番安心できるため、その都度確認してもらえたい。」との一言があった。率直な意見であり、これら活動の根本だったように思えた。